

## 第4回 子どもと音楽 2 ～音あそびと表現活動～



講師 静岡福祉大学子ども学科 准教授 二木 秀幸 氏

### はじめに

今日は勉強ではなく、皆さんが声を出して、歌って、踊って、そして“感じる”という研修です。

“音楽活動・・・表現活動”は難しいと思っていますませんか？夢中になって遊んでください。そしていろいろなことを感じてください。

### 1 まずはおそびま Show！

表現活動のときに大事なことは、想像する力、イメージする力だと言われています。イメージが貧困な人は、表現活動は無理だと、シビアなことを言ってしまうのですが、今日はいろいろ想像してください。

2人組で力比べをやります。どんなことでもいいので、10秒間、本気でやります。このとき、5歳児が相手だとしたら、どんな感じになるでしょう。10秒間、本気でやったときと、相手が5歳児だと思ってやったときとは、何が違いましたか。

力加減、大きさ、いろいろあると思います。5歳児相手に本気でやるわけにはいきません。本気のふりをするのです。中途半端なふりは、子どもにわかってしまいます。本気でやっている芝居をしてください。子どもは、そんな本気の先生、本気の大人に、絶対的なリスペクトをしたいと思います。

### 2 前回の質問に対する回答

Q1 ピアノがほとんど弾けず苦手です。上達のポイントを教えてください。

- ・歌詞や音を覚える

歌詞を見ながら弾くことは難しいので、できるだけ覚えさせます。ある程度歌が入っている方が、指も動

きやすくなるはずですよ。

- ・音を省略し簡易伴奏にする

必要な音だけにして、簡易伴奏に変えることもできます。楽譜どおりに弾くという決まりがある園の場合はしっかり練習してください。

- ・コードネームを習得する

コードを勉強すると、伴奏が弾きやすくなるかもしれません。

- ・苦手意識をなくす

「ピアノが好き。でも下手。」でいいのではないのでしょうか。苦手意識をなくし、一日5分でいいから、ピアノの前に座り、鍵盤を触ってください。5分触っていると弾きたくなくなってきます。苦手な人ほど、毎日やってください。

- ・弾き方の工夫をする

これは、弾ける人も参考になる方法です。例えば『山の音楽家』の2番は、オクターブあるいは2オクターブくらい上げて弾きます。伴奏どおりに弾くことも大事ですが、弾ける人は、弾んだり、転調したり、遊んだりしてほしいと思います。

- ・キーボードを活用する

キーボードのリズム伴奏や自動伴奏を活用し、苦手意識でピアノから逃げるのではなく、少しずつ好きになってほしいという提案です。

そして、とにかくあせらずに練習することです。

Q2 子どもが怒鳴り声になり、大きな声を出すことが主になってしまいます。「きれいな声で」と伝えると出さなくなってしまう。2、3歳の子どもに歌を楽しみながら歌ってほしいのですが、どう伝えたらいいのでしょうか。

- ・良いモデルをみせる

保育者が、良いモデルになって、きれいな声で歌うことです。

- ・まねっこ…〇〇のように歌ってみよう！

例えば、“優しいママの声のように”あるいは“空を飛んでいる小鳥さんのようなかわいらしい声で歌ってみよう”と提案してみてもいいです。

- ・録音して聞かせる

カセットデッキでの録音や、スマートフォンの録音機能、ICレコーダー等を活用して聞かせることは大事かもしれません。2歳児では少し難しいかもしれませんが、3～5歳児あたりになれば、有効な方法です。ビデオに撮って、みんなで見てみよう、というのを取り入れるといいかもしれません。

そして、それは皆さん自身の表現活動でも言えると思います。私は、研修会や授業でも自分自身を撮ります。自分を振り返り、言葉遣いは適切であるか、参加者に伝わるようなことをやっているかなど、フィードバックすることが大事です。

**Q3** 子どもに表現させる（させるという言い方は正しくないですが）ための手立てや良い方法があったら教えてほしいです。

- ・何を表現するのか目的をはっきりさせる

何を表現するのか、目的がはっきりしないと、子どももどうしていいかわからないし、保育者も困ってしまいます。前回紹介した、玉川大学名誉教授故岡田陽氏は著書の中で、「表現活動においてうまくいかないのは、目的がはっきりしていない、到達点をはっきりしていない、曖昧だからだ」と述べています。

- ・大人が良いモデルを見せる

わからない子どもに対しては、「こういうのはどうかな？」と提示することが大事だと思います。

- ・伝えたいと思うことの大切さ

- ・表現活動の2大要素…自己目的性と伝達性

こうしてみたい、ああしてみたい、〇〇になって

みたいという思い、それに向かって活動していくのが、ごっこ遊びです。それが達成できたときに初めて生まれるのが、伝達性です。こうして遊んだものを、「家に帰ってパパ、ママに見せてあげよう」になります。ですから、この自己目的性である〇〇ごっこであるとか、こういうものになりたいとか、こういうことをやりたいといったことを叶えさせてあげることが近道なのではないかと思います。保育者が積極的に関わって、劇遊びや表現遊び、歌遊び、運動遊びなどで遊ぶことで、子どもは自分の目的が達成され、そこに伝達性が出てくるのではないのでしょうか。

- ・ダメ出しではなくリクエストに ※Q2にも共通

これまで演出家は、指示を出し、できなかった役者に対し「なんでできないんだ！」と怒る、つまりダメ出しをしていました。人間はやはり、ダメ出しされると「ちえっ」となってしまうものです。認められて「よし！」となったときに、「そこまでできるのなら、次、こういうのってどうかな？」「パターンAのほかにはパターンBはできないかな？」などと投げかけるのです。つまり「ダメだ」というのではなく、「いいじゃん」というように、絶対的に一度認める、そしてそれを、「次何かできないかな？」とリクエストしていく、というパターンです。最近の舞台演出家は、こうする方が多いです。

例えばT君が大きな声で歌ったとします。「T君、声が大きくて素敵。だけど、隣に赤ちゃんが寝ていたら、その声だと起きちゃうから、赤ちゃんもうっとりするような声って、どんな感じかな？」と声を掛けたら、変わるかもしれません。世界の演出家の宮本亜門さんも、リクエストタイプのように。

ただし、危険なことはきちんと「危ないからダメ」と伝えてください。

### 3 テクニックをみがこう～発音・グルーブ感～

(発音) 発音とは、言葉に繋げることです。日本

の音楽は別ですが、西洋音楽（園で歌う歌のほとんど）では、メロディーラインをつくっているのは、すべて母音です。その前に出てくる子音があるから言葉になっています。日本語は特に、子音をはっきり発音すると、言葉がはっきり出てきます。時には、新聞や雑誌の記事を声に出して丁寧に読むとか、ナレーターやアナウンサーになったつもりで話してみると、言葉が明瞭になってくるようです。自分のスキルアップとして日常に加えてみるのもいいと思います。

（グルーヴ感）グルーヴ感は、皆さんが大好きなリズムで、リズム感、あるいはノリに繋がっていきます。簡単な言葉で言えば、表現になります。その曲が持っている感じ、感覚です。例えば、演歌歌手がポップスを歌うと、なんでも演歌に、クラシックの歌手が歌うとなんでもクラシックに聞こえてしまうように、その曲、その音楽が持つ感覚が必ずあります。グルーヴ感を鍛えるのはなかなか難しく、若くなればなるほど、若い人の感覚が入ったり、逆に、日本的、土着的なリズム感、感覚は、若い人には難しかったりするようです。

日本人は馬に乗っていなかったため、どうやら3拍子が難しいらしいです。農耕民族の耕す動作や、拍子をとることから、日本人は1拍子の民族らしいです。

#### 4 いろいろな表現をしてみよう！音楽であそぼう

『野菜の気持ち』（ボイス リズム）という曲を5人組でやってみます。楽譜が複雑になり、パートも増え、前回より難しくなっていますが、実はそれぞれに大事な役割があります。バナナのパートは、小節の頭を教えています。ピーナツのパートは、テンポキープ、メトロノームです。キャベツ、しいたけのパートは、それを飾る役割です。ポンかんは、小節の終わりを知らせます。

強弱記号の p（ピアノ）とは小さく、弱くです。

f（フォルテ）は強くです。小さくというと、何となく弱弱しくなってしまいます。でも違うのです。エネルギーの量は、p も f も一緒です。考え方としては、この部屋全体がエネルギーの塊だとして、そのエネルギーの塊を角砂糖くらいにギュッと凝縮したものが p です。f はそれが全体に大きく広がる感じ。強弱は、エネルギーの凝縮と拡散だと思ってください。ですから、歌うときに難しいのは、実は p を歌うときです。腹筋と背筋を使って、しっかり支えて発声しなければなりません。

『しあわせならてをたたこう』をバージョンアップさせてやってみましょう。歌や曲は、先入観があり、このようにやらなくてはいけないと考えがちかもしれません。それも大事ですが、そこから発展させる、ステップアップするというのも大事だと思います。「♪幸せならどこたたく？」と子ども達と楽しむのもいいでしょう。

『ぞうさん』は、一人で歌っている歌ではなく、掛け合いの歌です。ナレーター役とぞうさん役のドラマを感じながら歌うといいと思います。先生達が楽しそうに、嬉しそうに歌うと、子ども達も、歌いたい気持ちになります。

『オバケなんてないさ』は、♪タタタタッカタッカのリズムですが、はじめの♪タタタは三連符で、♪タッカタッカは付点のリズムです。日本人はこの♪タッカタッカという付点のリズムが苦手です。しかし、これを音楽に合わせて意識して歌うと、ノリがよくなります。三連符と付点の違いを意識するだけで、音楽が生き生きしてきます。『おべんとう』の歌も付点の曲です。

『もみじ』は二重唱です。園で子ども達と二重唱をすることはないかもしれませんが、スキルとしてマスターしておきたいです。ハーモニーを楽しみたいので、コーラスをやるときには、相手の音を聴いて、気持ちがいいのか、気持ちが悪いかを探りながらでもいいのでやってみると、楽しく歌えます。

## 5 いろいろな表現をしてみよう！絵本であそぼう

皆さんに、絵本をお持ちいただきました。こんな遊びがあってもいいのでは？というご提案です。使いたいのは、絵だけです。物語とは一切切り離してください。どれか一つの絵を決め、グループで順番を決めてください。決めた絵を使って、ショートストーリーを創ってください。前の人のお話を受けて、話を繋げていきます。好きな絵だけでなく、パッと開いたページの絵で話を創ったり、最後はハッピーエンドにするとか、怖い話にするなどと決めて話を創ったりしてください。子ども達の「先生、絵本読んで」「じゃあ好きなページを開いてごらん」と言って、即興で物語を繋げる、こんな形で応えられたら素敵です。そして、子どもの方から「私だったらこういう話にする」「ぼくの方が面白い話にできる」という声が上がると、創作活動が始まったら面白いと思いますし、逆に創ったお話に絵をつけたら、オリジナルの絵本になります。お部屋のおもちゃや遊具、あるいは、散歩先で子ども達が拾ったものでお話創りをしたり、絵から連想する歌を一曲挿入したりすれば、ちょっとしたショーケースになります。発表会全集のようなものから探さなくても、発表のネタはたくさんあります。義務ではなく、遊びとして考えられるといいです。

## 6 いろいろな表現をしてみよう！詩であそぼう

(くどうなおこ “のはらうた” より)

『すきなもの』 みみずみつお

相手が答えやすいように聞いてあげる問いかけ方が大事です。自分の好きなものを言い、相手に何が好きか聞いてください。聞かれたら、答えを返します。クラスでやったら、友達の良い好きなものを知ることができます。

『かたつむりのゆめ』 かたつむりでんきち

高い声、低い声、スピード感、強弱、縦横無尽に使い分けて表現するのが大事であり、歌うときにも

そういう表現が出てくると面白いと思います。

『こんにちは』 ひまわりあけみ

「こんにちは」に続く次にくる言葉を考えながら、声に出して読んでみてください。どれが正解というのはありません。大事なものは、感じながら喋ることです。セオリーに縛られてしまうと、画一されて、面白くなくなってしまいます。皆さんの感性を深く研ぎ澄まして、素敵な語りができるといいです。

## 7 まとめ

私の演劇の師匠で日本にミュージカルを広めた1人である演出家・関矢幸雄氏は「あそびは、あそべないとあそべない」と言っております。“理屈を言うだけでなく、しっかり遊んでみよう”ということです。もちろん理論を習得したり、勉強したりすることは大事なことです。一方で、実際に遊んでみる、説明書だけでは遊べないということです。“表現とは表に表すこと”だと言いましたが、“何を表すのか”、さらに“感じること”を大事にしてほしいです。子ども達はいろいろなことを感じ、発信していますので、それをしっかり受け止められる保育者でいてほしいです。アンテナをしっかり張り巡らせて、自分から伝えたいという気持ちになる、伝達性にもっていきけるような環境を作ってあげることが大事なのではないのでしょうか。時々、「表現は何でもありだから」という人がいますが、何でもありではないと思います。やはりある程度の目的をしっかりとって、その方向に向いていることが大事です。

そして皆さんに一番伝えたいことは、表現活動やるにあたって、常に本気でなくてはいけないということです。上手、下手ではなくて、本気でぶつかってほしいと思います。そういった活動がのびのびとできる環境をつくり、子ども達が常に発信できる場があることが大事なのではないかと思えます。

第4回 焼津市保育者資質向上研修会  
平成30年10月24日(水)  
会場：焼津公民館 大会議室